

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第298集

SE TO GUTI

# 瀬戸口古墳群

—第2次調査報告書—

1992

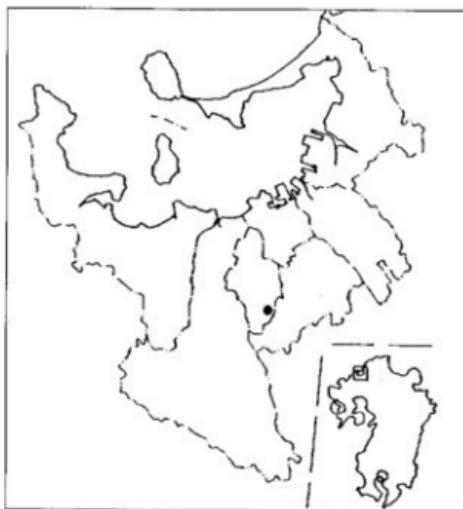
福岡市教育委員会

SE TO GUTI

# 瀬戸口古墳群

—第2次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第298集



1992

福岡市教育委員会

## 序

本市の平野部を東西に分かつ油山一帯は市民の森として親しまれているとともに、市域有数の古墳地帯でもあります。

近年、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏人口は増加の一途をたどっており、宅地化の波は山裾にまで及んでおります。これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によってやむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっております。

本書は民間の共同住宅建設に際し発掘調査を実施した瀬戸口古墳群の調査報告書であります。調査の結果、縄文時代から古墳時代にかけての重要な遺跡であることが確認されました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成4年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## 例　　言

1. 本書は、株式会社すまいによる共同住宅建設に伴って行われた瀬戸口古墳群の第2次調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北である。
3. 遺構の呼称は略号化し、土壤→SKとした。
4. 本書に使用した遺構実測図は、加藤良彦・黒田和生・英　豪之・溝口武司・荒谷義樹により遺物実測図は平川敬治・加藤による。製図は加藤・木村厚子が行った。
5. 本書に使用した遺構写真は加藤が、遺物写真の撮影は平川が行った。
6. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
7. 本書にかかる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 調査区の立地と環境	2
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	6
2. 1区の調査	7
3. 2区の調査	
6・7号墳の調査	9
8号墳の調査	11
出土遺物	17
土壤	21
IV. 小結	24

## 挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)	4	Fig.2 調査区位置図 (1/2000)	5
Fig.3 地形測量図 (1/300)	折込	Fig.4 1区調査前状況 (南から)	7
Fig.5 1区トレンチ (西上空から)	7	Fig.6 5号墳推定地現況 (東から)	8
Fig.7 5号墳推定地掘削状況 (東から)	8	Fig.8 第1トレンチ土層 (西から)	8
Fig.9 第1トレンチ土層断面図 (1/100)	8	Fig.10 2区調査前状況 (北から)	9
Fig.11 2区検出状況 (北から)	9	Fig.12 7号墳推定地現況 (南西から)	10
Fig.13 7号墳推定地掘削状況 (南西から)	10	Fig.14 2区全景 (北東上空から)	10
Fig.15 8号墳現況 (北から)	11	Fig.16 8号墳検出状況 (北から)	11
Fig.17 8号墳全景 (南上空から)	12	Fig.18 石室部検出状況 (北から)	12
Fig.19 墳丘内祭祀 (北から)	14	Fig.20 墳丘内祭祀 18~23 (西から)	14
Fig.21 坝08内魚骨 (北から)	14	Fig.22 墳丘内祭祀実測図 (1/30)	15

Fig.23 挖方検出状況（北から）	16	Fig.24 挖方検出状況（西から）	16
Fig.25 墳丘・周溝北側土層（西から）	16	Fig.26 墓道土層断面（西から）	16
Fig.27 墳丘東側土層断面（北から）	16	Fig.28 墳丘・周溝西側土層（北から）	16
Fig.29 8号墳実測図（1/60）	折込	Fig.30 墳丘内祭祀遺物実測図（1/4,1/6）	18
Fig.31 石室・墓道遺物実測図（1/2,1/4）	19	Fig.32 墳丘内祭祀遺物	20
Fig.33 石室出土玉類	20	Fig.34 SK-01（1/40）	21
Fig.35 SK-01（右）, 04（北から）	21	Fig.36 SK-04（1/40）	21
Fig.37 SK-02（1/40）	22	Fig.38 SK-02（北から）	22
Fig.39 SK-02 完掘状況（北から）	22	Fig.40 SK-05（1/40）	23
Fig.41 SK-05（南から）	23	Fig.42 SK-03（1/40）	23
Fig.43 SK-03（西から）	23	Fig.44 SK-03（北から）	23
Fig.45 SK-06（1/40）	23		

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

今回の調査は昭和63年4月21日、福岡市城南区大字東油山字瀬戸口442-2他15筆地内において地権者より共同住宅建設の計画にあたって福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願いが申請された事に始まる。受付番号は教理63-2-142である。

埋蔵文化財課では事業地内に瀬戸口古墳群の、昭和49年実施された第1次調査の3基をのぞく4基が含まれることを確認、同63年4月21日現地踏査を実施し古墳1基の現存を確認、他は埋没しているものと判断された。この後、地権者と株式会社すまいとの売買契約が成立、計画が具体化したため埋蔵文化財課では同社と現状での保存を巡って設計変更等が可能か協議を行ったが困難であると判断。よって同社との委託契約によって本課が記録保存のため緊急発掘調査を行う事となった。

調査は平成元年6月26日から同年8月28日まで実施された。調査面積は1,168m<sup>2</sup>である。

尚、調査に際し、株式会社すまい・日総工業株式会社には多大な御理解と御協力を賜わった。記して感謝申し上げる次第である。

調査番号	8928	遺跡略号	SGK-2
調査地地籍	城南区大字東油山字瀬戸口442-2地	分布地図番号	64東油山
開発面積	17,076m <sup>2</sup>	調査実施面積	1168m <sup>2</sup>
調査機関	890626~890828	事前審査番号	63-2-142

## 2. 調査の組織

調査委託：株式会社すまい

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎(当時)

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝(当時) 埋蔵文化財課第2係長 柳沢一男(当時)

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 松延好文(当時)

調査担当：埋蔵文化財課第2係 加藤良彦

調査協力：百武義隆 濱戸啓治 神尾順次 三浦義隆 黒田和生 英豪之 溝口武司  
荒谷義樹(当時福岡大学) 萬スミヨ 徳永ノブヨ 堀川ヒロ子 庄野崎ヒデ子  
土斐崎初栄 柴田勝子 藤崎久子 原幸子 若狭睦代 堤流代 能美須賀子  
橋崎多佳子 池田初実 国武真理子

資料整理：平川敬治(九州大学) 木村厚子 桥崎多佳子 能美須賀子 池田初美  
国武真理子 小城信子 崎田 慧

## II. 調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ2km、博多湾岸より南へ8kmの地点、福岡平野の背部をなす背振山地から北に延びて平野を東の福岡平野・西の早良平野とに分断する、油山山塊・平尾丘陵の中心をなす標高569.4mの油山北東山麓に位置する。この油山及び東西の支脈である片綱山(標高292.6m)・荒平山(394.6m)の山麓一帯は樋井川や片江川等の小河川の支流が多数分岐し、花崗岩の基盤を深く開削し八手状に延びる狹長な丘陵を多数形成しており、ここに多くの古墳群を生み出している。瀬戸口古墳群もこうした油山から北東に派生する舌状丘陵の中央から先端部にかけての東斜面に位置している。古代にあっては「和名抄」に見える早良郡七郷の一つ毗伊郷に属する地域である。

周辺の歴史環境を観察してみると、旧石器時代の遺跡ではカルメル修道院遺跡で尖頭器が発見され、五ヶ村池遺跡・飯倉E遺跡からナイフ型石器・柏原遺跡群で台形石器・ナイフ型石器・細石核・細石刃を検出している。

縄文時代の遺跡は羽黒神社遺跡・鳥越古墳群・早苗田古墳群・大牟田遺跡・箱の池遺跡・柏原遺跡群が早期の遺跡として、前期の遺跡としては五ヶ村池遺跡・七隈古墳群・柏原遺跡群があげられ、中期としては柏原遺跡群、晚期では笠栗遺跡・早苗田古墳群・柏原遺跡群があり、他に遺跡として飯倉E・G遺跡・クエゾノ遺跡・井手遺跡があげられる。周辺では特に早・前期が目立つ。

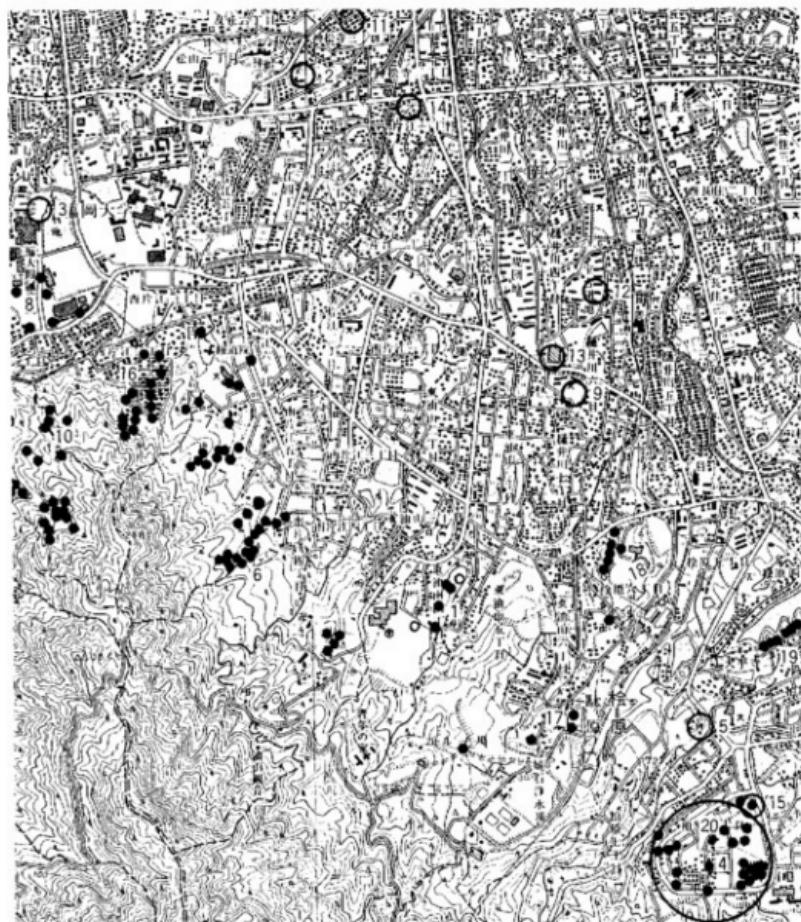
弥生時代に至ると遺跡は増大するが半野の丘陵部に多い。前期には、田島B遺跡・淨泉寺遺跡・カルメル修道院遺跡・飯倉原遺跡などがあり、カルメル修道院遺跡では土壙墓から錫銅3個が、飯倉原遺跡では壺形墓から細形銅剣が出土している。中期には宝台遺跡・丸尾台遺跡・別府遺跡・飯倉遺跡群等遺跡数が増えた。後期では小笠遺跡・丁隈遺跡・飯倉遺跡群があり、飯倉G遺跡では木棺墓から小型彷彿鏡・鉄刀子が検出されている。

古墳時代の集落は神松寺遺跡・片江辻遺跡・飯倉遺跡群等で確認されている。

古代から中世にかけては製鉄遺跡が目立ち、笠栗遺跡・熊添池周辺の飯倉遺跡群と柏原遺跡群で製鉄炉・鍛冶炉等製鉄関連の遺構と遺物が多数検出されている。飯倉遺跡群では奈良時代から中世の集落・墓地を、柏原遺跡群では8世紀後半から9世紀前半にかけての掘立柱建物31棟以上と唐三彩・越州窯系陶磁・長沙窯系陶磁・石器・硯・墨書き土器等が検出され製鉄に関連した有力集団の存在をうかがわせている。また13世紀後半から14世紀前半にかけての方形区画の構と57棟の掘立柱建物と水田遺構等、薩摩國入来院家文書の「蒙古合戰勲功賞配分狀」と良く一致する居館址が検出されている。また古代末から中世にかけては油山の東に泉福寺・西に天福寺と密教系の寺が創建され、盛時には各々僧坊360を数えたと伝えられる。この影響か京ノ隈遺跡の古墳墳丘上で平安時代末の経塚が発見されている。

ここで、油山山麓の毗伊郷側の古墳群をながめてみると、前期古墳としては前方後方墳の京ノ隈古墳がある。首長墓系列の古墳で全長40mの墳丘に箱式石棺と粘土櫛を各1基主体としており、剣・鏡・銀先各1点の鉄製品が副葬されていた。4世紀末と考えられている。後期では6世紀中葉と考えられる神松寺古墳がこれにつぐと考えられ、全長20mの前方後円墳で複室の横穴式石室を内部主体としている。この時期以降各群集墳の造営が初まる。これに継続する首長墓系列としては柏原A-2号墳があげられる。横穴式石室を主体とするもので墳丘盛土と周溝の1/2を失っていたが残りの周溝の計上から40m程の前方後円墳と推定されている。

群集墳は山麓中央部の七隈古墳群以東、油山東側山麓に倉瀬戸古墳群・早苗田古墳群・鳥越古墳群・本遠跡一瀬戸口古墳群・駄ヶ原古墳群・東油山古墳群、さらに片禪山山麓部に大平寺古墳群・柏原古墳群・四十塚古墳群・人牟田古墳群等約140基が知られている。以上のような多数の群集墳が形成された背景のひとつには、大谷・倉瀬戸古墳群・柏原古墳群で多量の鉄滓が供献され、また後代の柏原M遺跡の大規模な製鉄遺跡が成立している様に鉄器の生産があげられている。



- |            |               |             |
|------------|---------------|-------------|
| 1. 湘戸口古墳群  | 2. カルメル修道院内遺跡 | 3. 五ヶ村池遺跡   |
| 4. 柏原遺跡群   | 5. 利黒神社遺跡     | 6. 鳥鶴古墳群    |
| 7. 草薙田古墳群  | 8. 七隈古墳群      | 9. 蓬萊遺跡     |
| 10. 大谷古墳群  | 11. 清泉寺遺跡     | 12. 宝台遺跡    |
| 13. 丸尾台遺跡  | 14. 片江辻遺跡     | 15. 柏原A・B号墳 |
| 16. 金堀戸古墳群 | 17. 猪々塚古墳群    | 18. 東池山古墳群  |
| 19. 大平寺古墳群 | 20. 桜原古墳群     |             |

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

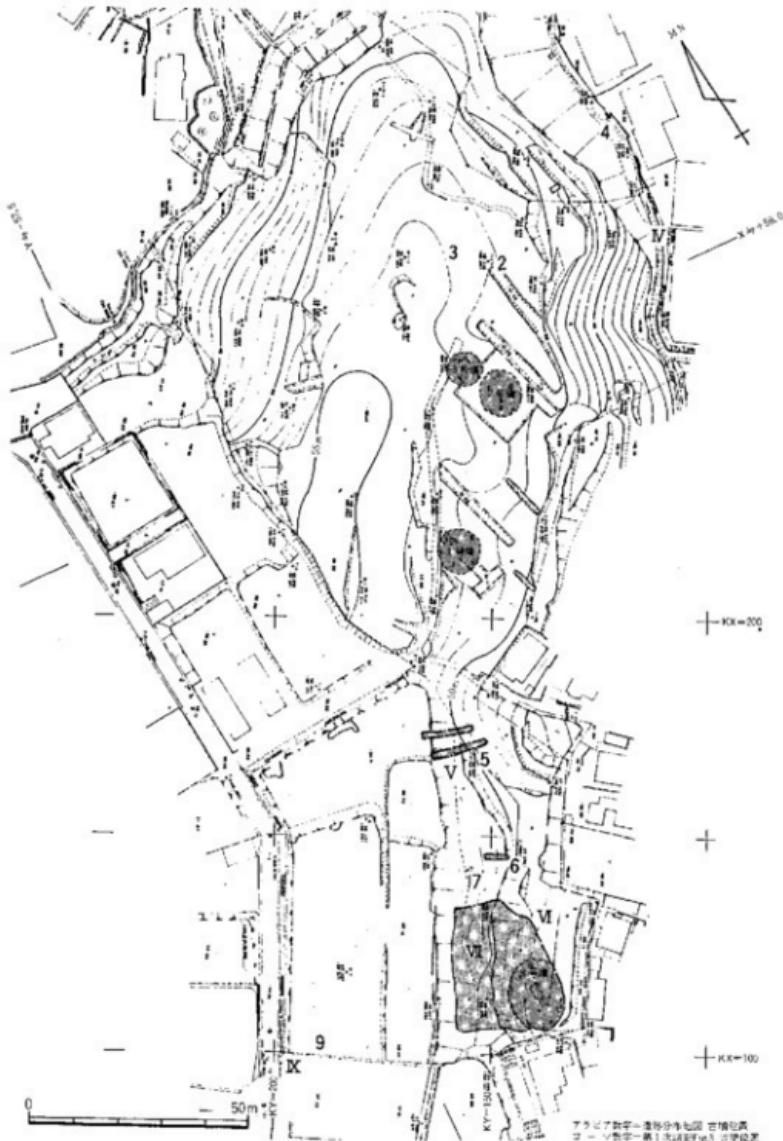


Fig.2 調査区位置図 (1/2000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

本古墳群は油山山麓から北東に延びた標高約56m、谷部との比高約20mの舌状丘陵の先端及び中央部の東斜面に立地している。昭和43年度からの分布調査時には7基の古墳が確認されており<sup>註1)</sup>、昭和49年の第1次調査時には9基を確認、破壊消失した9号墳をのぞく1～8号墳が現認されている。

第1次調査では先端部の1～3号墳の調査が行われ、1号墳は墓壙と径10m前後の墳丘の一部の残存でIV～VI期の須恵器・金環・鉄鎌・砥石が検出されている。2号墳は横穴式石室の一部と径10m前後の墳丘が残っており、V～VI期の須恵器・鉄刀・銚・刀子・鉄鏃・兵庫鏡と思われる鉄器・勾玉・ガラス玉・飾り銀金具・砥石を出土している。3号墳は横穴式石室の基底部のみの検出で遺物の検出もない。他の4～8号墳については4・8号墳は墳丘のみの残存が確認されているが5～7号墳は崩壊と解され、かろうじて確認したとなっている。

今回の調査に当たっても踏査を行なったが、Fig. 2に示す通り分布地図と1次調査の位置図と大きなズレが有り、4号墳は確認できず現認できたのは8号墳のみで、5～7号墳は基底部のみが残って埋没している可能性が考えられ、5号墳を含む地区約303m<sup>2</sup>を1区、6～8号墳を含む約865m<sup>2</sup>を2区として調査区を設定した。(Fig. 2・3)

1区の5号墳推定地は岩の露出が3ヶ所密集する部分があり、ここにトレンチを設定掘削した結果、転轍の集合であった事を確認。

2区の調査は斜面の調査区下端に民家が迫っており、表土及び排土の大半の搬出を丘陵上の平坦部に行わざるを得ず重力に逆らってのかなりの重作業となった。結果としては6・7号墳も5号墳同様、転轍の集合の可能性が高い結果となった。8号墳は横穴式石室の主体部を失っているものの墳丘径15.4m、周溝径17.4m、墳丘の高さ3m程の円墳である事を確認、墓道部左側の墳丘内の供獻土器と石室部・墓道からⅢ・Ⅳ・Ⅴ期にわたる須恵器とガラス玉・鉄刀等を検出。また供獻土器内の杯の内部に魚骨が残存している事も確認できた。他に斜面裾部と墳丘下で3基の縄文時代と思われる落し穴を、斜面部で2基の周壁の焼けた土壙を検出した。

註1)「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集」福岡市教育委員会 1970年

註2)「瀬戸口古墳群」福岡市西区東油山字瀬戸口町古墳群調査報告書 1975年

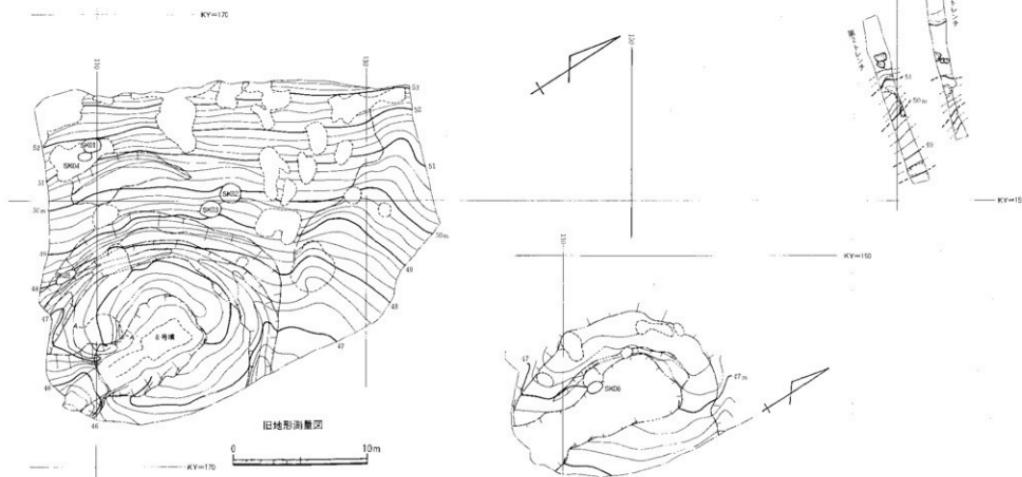
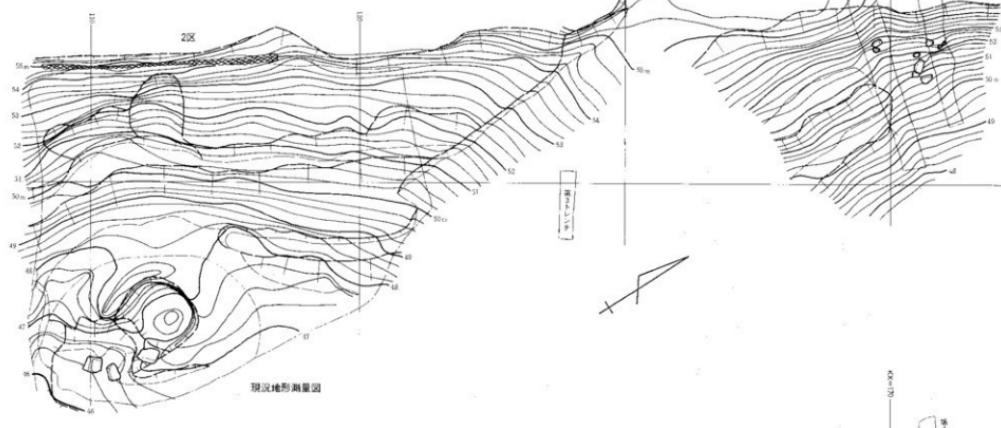


Fig.3 地形測量図 (1/300)

## 2. 1区の調査

1区は第1次調査地点と2区の中間点の南東からさらに小さく開削された小谷の斜度30°程の急斜面に位置する。第1次調査区から続く緩斜面はこの上部から2区上部にかけて既に平坦に造成されており、この造成時の排土が多くなされている。9号墳は昭和43年以降のこの造成時に消滅した様である。

斜面の南部中位には道状の幅の狭い整形面が有り、この北側に3ヶ所径1m前後の自然礫が密集して露出している部分があり(Fig. 3・4・6)、この部位以外に古墳の可能性を示すものが見当たらず、分布地図の推定位置より北側にずれるが、これを5号墳推定地とし、幅1m長さ11m程のトレンチを設定、これを第1トレンチとし、さらに南側5mの位置にこれと平行

して、道路状の整形部が古墳の整形部の残存の可能性が有るとしてこれも確認する様第2トレンチを設定、掘削した(Fig. 5・7)。

土層断面を観察すると(Fig. 8・9)、上位に2度にわたる表土の形成と花崗岩バイラン土の堆積が認められ、岩の集合部はこの下面の花崗バイラン土の客土下から延びる樹根で下方への転落をとどめられている状態で、岩は客土中からその上面に位置し、旧地表の上部に位置している。地元の古老の話によると第2次大戦中丘陵上部を、松根を取り、高射砲陣地に使用するとして大きく開削したと言う事であり、その開削時の転落と思われ、さらに上部の客土は昭和43年以降の造成時の客土と判断される。

よって5号墳は転礫の誤認との結果を得た。



Fig. 4 1区調査前状況（南から）



Fig. 5 1区トレンチ（西上空から）



Fig.6 5号填推定地現況（東から）



Fig.7 5号填推定地掘削状況（東から）



Fig.8 第1トレンチ土層（西から）

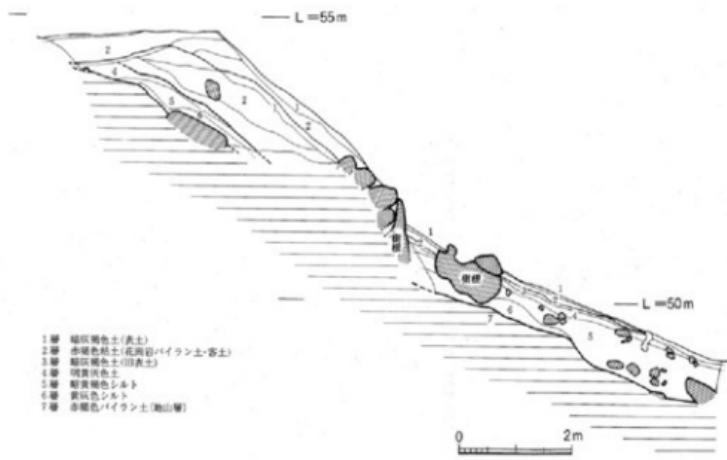


Fig.9 第1トレンチ土層断面図 (1/100)

### 3. 2区の調査

2区は丘陵中位の東側斜面、6～8号墳の分布する区域で865m<sup>2</sup>の範囲を調査対象とした。1区同様、現況は大戦中及び戦後の造成期によるものと思われる1m前後の転疊が多数散布している状態（Fig.10・3）であった。調査区南西隅の等高線52～55mの付近にはほとんど倒壊した自然礫積みの炭焼窯が有り、古老の言によると戦後さかんに焼いていたそうであるが、これに至る道であるのか、49～50mの等高線に平行に道状の狭い整形面が有る。また東端部分は伐採した樹木搬出用につくられた作業道の様である。8号墳は斜面裾に明確な盛土部分が有りすぐ確認されたが、6・7号墳は容易に判別がつかず、Fig. 2の遺跡分布地図分の推定位置にそれらしき石の集積と高まりが有り、重機による表土の掘削前にこれの確認を行った。



Fig. 10 2区調査前状況（北から）

#### 6・7号墳の調査

6号墳推定部は未伐採部分であったため、重機により斜面上方からトレーニングチ掘削を行い、これを第3トレーニングとした（Fig. 3）。結果としては造成時の客土の高まりであった。周囲にも転疊が多数有り、これの集中部を誤認した可能性も高い。

7号墳は一見矩形の岩の集中部分が有り（Fig. 12）、内部を掘削してみたが、岩は赤褐色バイラン客土中に有り、下の基盤層にまで至っておらず、また腰石を組み合わせた様な状況でもなく、これも転疊の誤認と考えられた。

よって2区での対象は8号墳のみにしほり込み、これと地山整形及び周辺部の調査とし、排土処理の困難さから表土の掘削部は範囲を限定した。



Fig. 11 2区検出状況（北から）



Fig.12 7号填推定地現況（南西から）



Fig.13 7号填推定地掘削状況（南西から）



Fig.14 2区全景（北東上空から）

## 8号墳の調査

丘陵斜面の地形変換線下の緩斜面に位置する。南側の住宅が盛土を行って建築されているため、一見谷底に占地している様な観を受ける。標高48mの位置に有り、見かけの墳丘は16mを測る円墳である。

第1次調査の段階で墳丘中央部から南にかけ大きくえぐられ、抜き取られた横穴式石室の石材が散乱している事が確認されていたが、現況での大きな改変は認められなかった(Fig.15)。散乱している石材は花崗岩で手前の2個は直方体に近く袖石に適当な大きさである。石材抜き取り跡に残る石材は $1.55 \times 1.15 \times 0.55$ mの偏平な石材で直角方向の2辺に筒を打って分断した面が有り、 $3 \times 2$ m前後の天井石を4つに分断した残りの様である。地元の古老から大戦中の

昭和17・18年頃、東側の民家部分から道をつくり馬車で古墳の横まで乗り付けて横穴式石室の石材を桧原の集落に持ち去ったとの言を得た。

### 石室部分 (Fig. 18・29)

主要な石材は一石残らず抜き取られており、根固めや裏込めに用いた20~40cmの小石と、玄室部分に2~5cm程の敷石に用いられた河原礫が若干残る程度であった。しかし丹念に撒乱土を除去していくと腰石設置時の掘り込みや石の圧痕が残っており、これによって石室平面プランの復原が可能と考えられる。これにしたがって復原すると石室は主軸をN-5°30'Wにとる南に開口する単室の両袖型横穴式石室である。奥壁から3.3mの位置に第1櫛石を1~2石でもうけ、玄門部に第2櫛石をもうけていた様である。

玄室部分は $3.5m \times 2.0m$ 強の長方形プランで奥壁を長大な一石か、幅40cm程の腰石を混じえた2石で構築、左側壁は長大な2石、右側壁は2~3石の腰石で構築され、両側壁が奥壁をはさ



Fig. 15 8号墳現況（北から）



Fig. 16 8号墳検出状況（北から）



Fig.17 8号墳全景（南上空から）



Fig.18 石室部検出状況（北から）

み込む様に配している。玄門部は左袖幅が0.3m強、右袖幅が0.3m強である。床面には2~4cmの小振りな河原砾を密に敷きつめていたと思われるが、これすらも大半が持ち去られている。

羨道部は幅1.0m、長さ3.7m程で、前方の擾乱が著しく石の抜き跡が乱れているため確定的でないが3~4石の腰石で構築していたと考えられる。墳丘規模の割りには小規模な石室主体部であった様である。

#### 地山整形 (Fig. 3・29)

古墳は丘陵の急斜面と緩斜面との地形変換線近くに位置するため、その東の斜面側に石室中央から約10mの半径で、馬蹄形に平坦面を削りだして基底面をつくり、さらに中央から約8mの位置に掘部が明らかでないが幅1.4m~2.4mの馬蹄形溝を掘削する。深さは浅く基底面から30cm程の掘り下げで、断面形は浅いU字形を成している。溝底は緩斜面に沿って北西部を最高所として南西方向に下がっている。

石室の構築にはこの掘削では平坦面が不充分であったようでさらに南北10m・石室中央から4m程を馬蹄形に60cm掘り下げ残土を西侧傾斜面に押し出して整地し、幅7m程の平坦面をつくり出している (Fig. 29 墳丘横断面 39~44層)。

#### 掘方・墓道 (Fig. 23・24・26・29)

掘方は2段目の整地面中央に、奥壁側5.2m・羨道側2.8mと玄室部を広く長さ8mの羽子板形に、2段目の整地面から80cmの深さで、断面は垂直に近い逆台形に掘削されている。床面はほぼ水平である。

墓道は掘方の羨道部に続き、約3.5mを検出、掘方羨道部から逆に幅4.6mと聞く。底面は羨道から3.5mで50cm程ゆるやかに下がっている。断面形は浅いU字形である。周溝覆土と同様の黒褐色土の堆積が見られ、この層中に多量の須恵器を含み、人工的に埋められた形跡はうかがえない。

#### 墳丘 (Fig. 17・24・27・28・29)

墳丘盛土は周溝の中央から0.6~1.3m内側の面から行っており、地山整形面のラインとは一致しない。地山整形で露出した花崗岩塊乱層及びその上の暗褐色土上から盛土がなされている。旧表土の腐植土層らしきものは見当たらず、削り取られている様である。墳径は東西方向で15.4m、周溝外径で17.4mを測る。墳丘残存高は石室床面から2.8mである。

石室裏込め部分から擾乱で削り取られているため判断しづらいが、層が薄く幅の狭い層群が内側に、層が厚くしまりのない広い層群がその外側を被っており性格が異なっていると思われる。

内側の層群は黄灰色粘土を混じた固い層と花崗岩塊乱土・暗褐色土の地山土の混土層とを交互につき固めており、これが掘方と石室壁石間の裏込め・被覆の盛土で、後者は天井被覆と墳丘整形のための盛土と考えられる。



Fig.19 墳丘内祭祀（北から）



Fig.20 墳丘内祭祀18～23（西から）



Fig.21 壱08内魚骨（北から）

#### 遺物出土状況 (Fig.19～22・29)

遺物は石室部で少量、墓道・羨道左側の墳丘内で多量に、その下位の周溝から少量検出している。

石室内は前述した様に徹底した攪乱が行われ、また近世遺物も多数検出されたため、少なくとも近世には開封されほとんどの遺物は搬出された様である。残った遺物は少量で、それも破碎され広く散布している状態で原位置を保つものはない (Fig.29)。

墓道部は最下層の6層中から土師器高壺の少片を検出したのみであるが5層から多量に4層から少量検出した。5層は墳丘完成後の腐植土と思われる自然堆積層であり、よって遺物は追葬時に石室内より引き出されたものと思われる。

羨道左側の墳丘内は祭祀の遺物と思われる (Fig.19・22)。検出時、真上に松の樹根があり、一部これの攪乱を受けている。墳丘横断土層の9層上面に位置し周囲に炭粒が多く散っていた。標高48m程の周溝に近い群と48.5m程の石室側の群とに分かれる。壺や横瓶等の大型の須恵器は破碎されているが、壺頸は大部分現況を保っている。壺頸は完形の高壺を全く欠くのが特徴的で、蓋壺のセットになったもの1～10・21・22と壺身だけのもの17・18・19・20がある。殊に蓋壺は内部に食物を入れたまま献じられた様で、実際壺08には魚骨状のものがほとんど泥化していたが残存していた (Fig.21)。担当者の連絡不徹底で誤っ

て内部を洗浄してしまっており、骨片を一片残すのみで魚種を分析するに至っていない。出土層位がゆるい天井核窓・墳丘整形の第2次盛土の最下部であり、多量の炭粒を伴出しているところから、石室に天井石を設置後、家屋の新築では棟上式に相当する祭祀を酒食を伴うか火を用いて行い、この後壇等大型品は破碎しこれを一気に埋め込んで墳丘整形を仕上げたものと考えられる。

周溝からは祭祀下位の部分のみで須恵器が検出されており、これと接合するため墳丘内のものが流出したと考えられる。

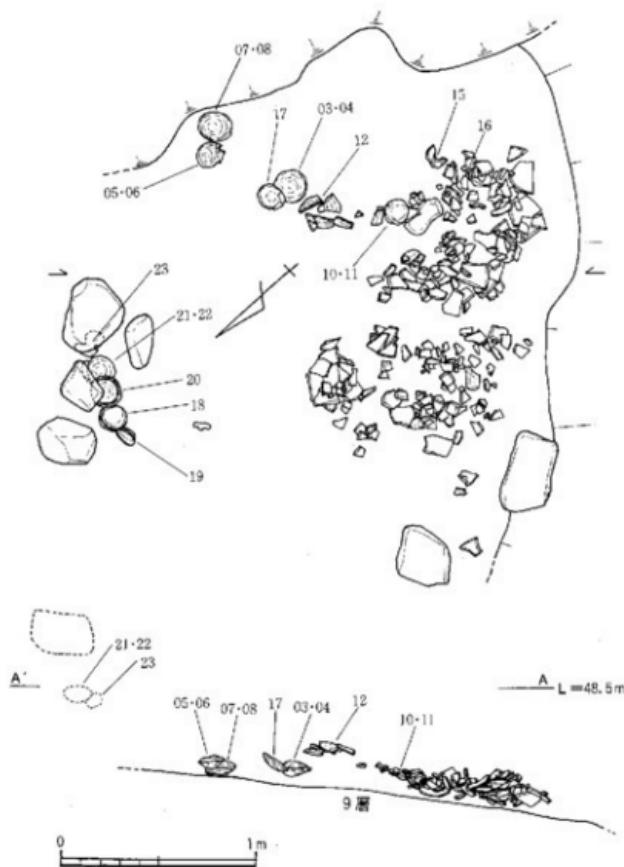


Fig. 22 墳丘内祭祀実測図 (1/30)



Fig.23 掘方検出状況（北から）



Fig.24 掘方検出状況（西から）



Fig.25 塗丘・周溝北側土層（西から）



Fig.26 墓道土層断面（西から）



Fig.27 塗丘東側土層断面（北から）



Fig.28 塗丘・周溝西側土層（北から）

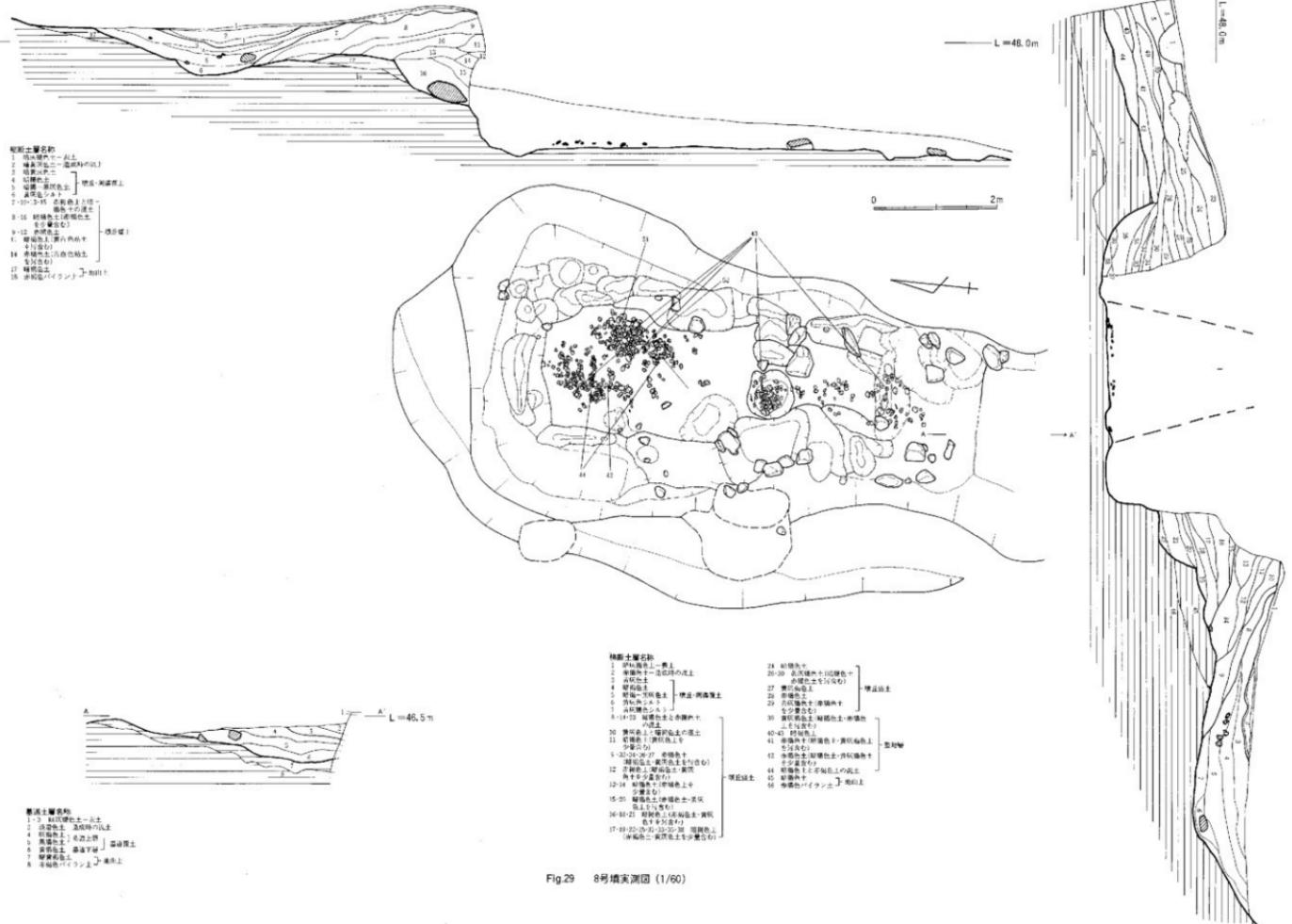


Fig.29 8号填宾测圆 (1/60)

### 出土遺物 (Fig. 30・31・32・33)

Fig.30・32は墳丘内祭祀の遺物で1～16が周溝側の一群・18～23が石室側の一群である。17の土師器以外は須恵器である。1～10・21・22は蓋坏のセットで全て完形品である。1は口径13.1・器高4.0cm、外面の体部1/3から上が回転ケズリで、坏類の調整の回転方向は全て右回転である。2は受け部径13.6・器高4.0cmで外面が灰かぶり、焼成良好。3は口径13.0・器高4.1cmで焼成良好、気泡が目立つ。4は受け部径12.0・器高4.0cmで焼成良好、気泡が目立つ。5は口径12.8・器高4.0cmで外面が一部灰をかぶり棒状の黒斑が2本見られる。6は受け部径13.7・器高4.1cmで外面の半分に灰がかぶり若干焼けひずむ。7は口径13.6・器高4.5cmで焼成良好。8は受け部径13.2・器高4.1cmで外面の半分が灰かぶり。9は口径12.6・器高3.9cm。10は受け部径13.0・器高3.8cmで焼成がゆるい。11は壺蓋で口径12.4・器高3.3cm、底径5.8cmと偏平な体部をもつ。横瓶15の口径がこれに合う。12は高坏蓋で口径13.6・器高4.8cmでつまみをもつ。体部上半はカキ目調整。13は提瓶で角状の小さな突起を2個付す。胴径20.0・器高15.9cmと高く平瓶の体部に近い。口縁を欠くが、頸部の上下にヘラ記号を刻む。14は広口壺で口径15.4・器高18.8cmで頸部外面にカキ目工具によるタテ方向の条線文、胴部に同工具の刺突文を施す。気泡・灰かぶり・焼き付きが著しい。15は横瓶で口径11.6・胴長径31.4・矩径24.0・器高27.8cm。胴外面は木目直交の平行タタキ後カキ目調整、内面は同心円の当て具痕が残る。焼成はややゆるい。16は大型の壺で口径21.6・胴最大径は肩部に有り径41.0・器高42.2cm。胴外面は木目直交の平行タタキで上半はこれにカキ目。内面には同心円の当て具痕が残る。焼成は良好だが頭部から肩部に灰がかぶり、底部がひずむ。同様の壺が他に2個体有る。18は盤で口径13.0・器高6.7cmで外面はカキ目、体部下から底部は手持ちヘラケズリ。体部下位に提瓶と同じヘラ記号を刻す。19は無蓋高坏の坏部で脚部はもともと欠いている。口径10.0・器高5.6cm、外面下位の沈線間にカキ目後、同工具による連続刺突文を施す。20は坏身で受け部径14.9・器高4.3cm。21・22は蓋坏で21は口径13.8・器高4.5cm、22は受け部径13.9・器高4.0cm。23は盤で口径13.2・器高14.1cmで、胴部上位の沈線間にカキ目後同工具による連続刺突文を施す。以上Ⅲ B期新相に属する。

Fig.31の24～40は墓道の4・5層出土。24～27は須恵器坏蓋で24は口径13.5・器高4.8cm、ほぼ完形。25は口径12.4・器高3.8cmで残存1/2。26は口径11.5～12.3・器高4.0cmで焼けひずんでいる。27は口径12.4・器高4.5cmで残存は3/7で石室部のものと接合する。28・29は坏身で28は受け部径12.4・器高3.7cmで外面灰かぶりで内面は気泡が目立つ。29は受け部径13.0・器高3.9cm外面灰かぶりで内面は気泡が目立つ。残存は1/2。30は高坏蓋で口径12.2～12.6・器高4.6cmでつまみをもち、石室部のものと接合する。31是有蓋高坏で受け部径13.8・器高14.1cm。坏部下半にカキ目が施され脚との接合部に接合時の多角形のヘラ痕が残る。32は無蓋高坏で脚部を欠く。口径11.4cmで残存は1/4、坏部下半の2条の沈線間に突帯状になる。33も無蓋高坏で口径10.4・器高10.0cm。坏外面下半はヘラケズリ後にカキ目調整。脚内部にヘラ記号を刻む。34は坏蓋でつまみを有する。

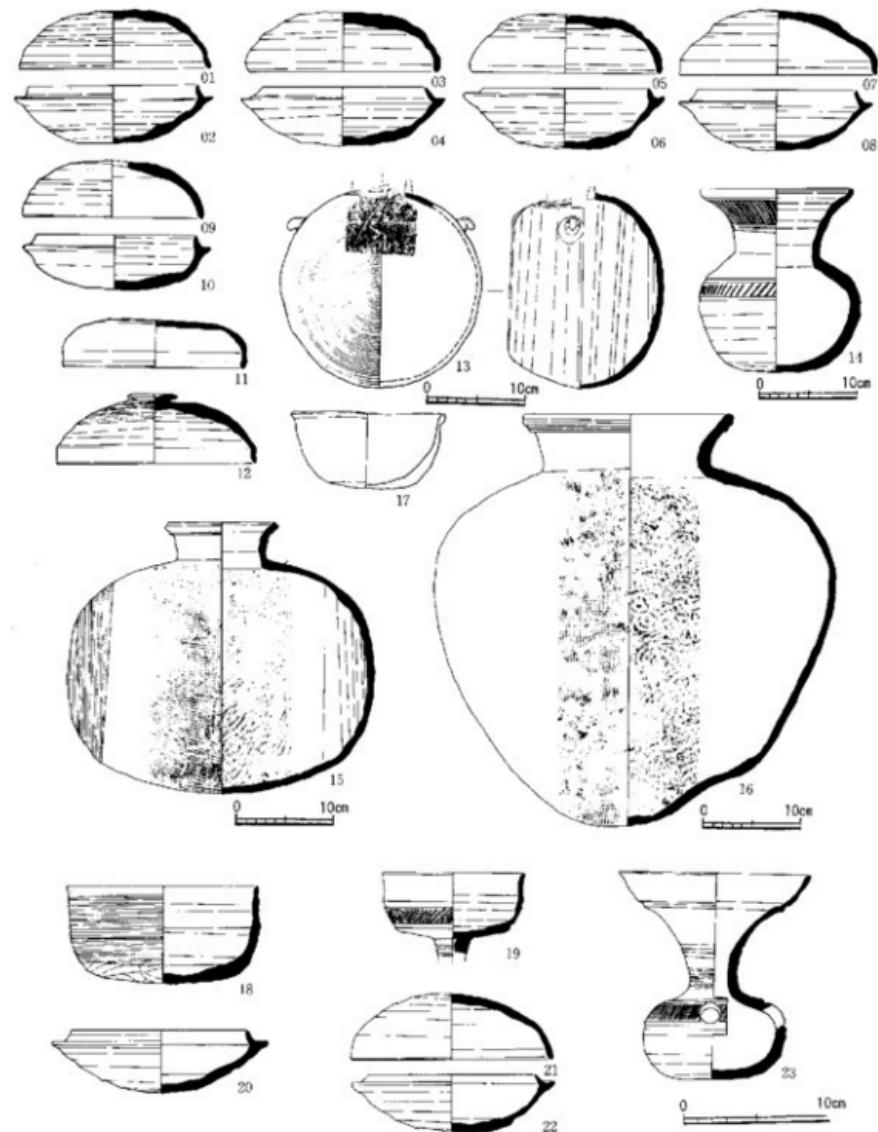


Fig.30 墳丘内祭祀遺物実測図 (1/4, 1/6)

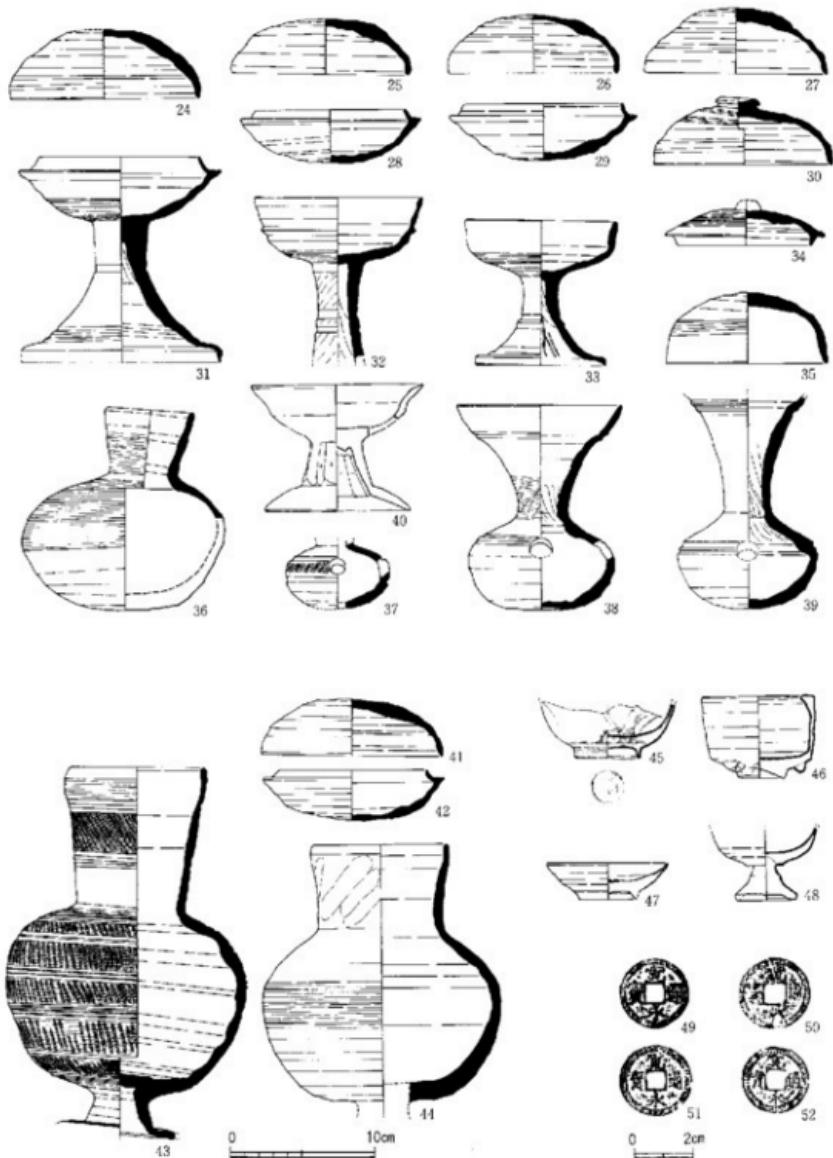


Fig.31 石室・墓道遺物実測図 (1/2, 1/4)



Fig. 32 墳丘内祭祀遺物

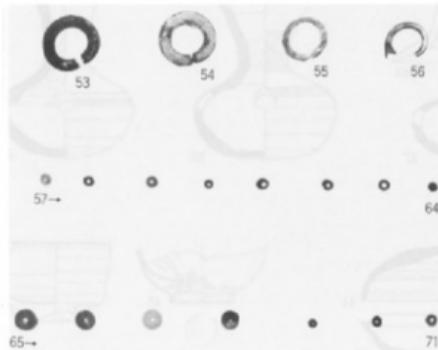


Fig. 33 石室出土玉類

口径9.2・残存器高2.2cm、外面灰かぶり。35は壺蓋で口径11.0・器高4.9cm。外面は一部灰かぶり口縁が焼けひずむ。36は小型の須恵器平瓶で胴部最大径13.8・器高13.5cm。口縁～胴上半までカキ目、下半は回転ヘラケズリ。37～39は鰐。37は小型の鰐胴部で胴径7.2cm。胴中位の沈線間にカキ目工具による連続刺突文を施す。焼成良好。38は口径11.4・器高14.0cmで外面頭部にカキ目。胴下半は回転ヘラケズリでヘラ記号を記す。39は口縁部を欠くが残存高で14.4cm胴径9.7cm。外面は著しい灰かぶりである。40は土師器高坏で復原口径・器高11.8cm。調整は不明瞭だが脚外面はタテ方向、内面はヨコ方向のケズリである。他に鰐、提瓶、甕を検出している。石室部の小片との接合関係が多く、祭祀よりは追葬時の石室内からかき出したものと考える方が妥当と思われる。

41～52は石室部床面及びその攢乱層からの出土。41～44は須恵で41は壺蓋。

口径12.4・器高3.7cm。42は壺身。受け

部径12.4・器高3.5cm外面灰かぶり。43は脚付長頸壺で小片となって広く石室内に散乱する。口径9.0・胴径16.4cmをはかる。頸部と胴部にカキ目を施しそこに同工具による連続刺突文を6段施す。脚部を欠く。44も同じく脚付長頸壺であるが43より口縁が太く短い。口径9.0・胴径16.3cm。胴中位にカキ目、口縁部にシボリ痕が残る。45からは近世遺物で45は肥前系の染付碗。底径7.4cm。46は肥前系の白磁香炉で口径9.8cm。釉は灰色で半透明。高台脇に突起を3個付す。47は同じく白磁で口径8.2cm。口縁部に炭化物が付着。灯明皿として使用。48は同じく白磁仏飯器。49～52は「寛永通宝」の銅錢である。径23～24.5mm。他に鉄錢も4点検出している。1点は方錢。

Fig. 33は石室・墓道出土の耳環・玉類で53・54は銅地銀環・55・56は同じく金環。57～73はガラス玉で色調は57・58が明青色・65・66が緑・67・68が茶で他はコバルトブルーである。他に鉄鏡5・刀子1・鉄刀1の検出があるが細片である。

### 土壤 (Fig. 34~45)

丘陵斜面及び墳丘下で 6 基の土壤を検出した。2 基が周壁の焼けた土壤 (SK-01, 04)、3 基が落し穴状土壤。(SK-03・05・06)、1 基が性格不明である (SK-02)。いずれも遺物の検出はない。SK-01 (Fig. 34・35)

8 号墳より 7 m 程西側の急斜面上、標高 52 m 付近に位置する。1.2 m × 1.15 m の隅丸方形に近く方位を N-23°-E とする。深さは山側で 60 cm を測る。底から壁面の焼けた土壤で底に炭粒がたまる。SK-04 を切っており古墳との関連は不明。遺物の検出はない。

#### SK-04 (Fig. 35・36)

SK-01 の谷側でこれに切られる位置にある。1.1 m × 0.7 m の長方形土壤で SK-01 同様四壁が焼ける。残りは悪く深さは山側で 12 cm を測るのみである。

#### SK-02 (Fig. 37~39)

SK-01 の北東側 11 m 程の位置で標高 49 m 付近に位置する。山側に 1.2 m × 1.2 m のその下にさらに 1.65 m × 1.4 m の 2 段の不整形の掘り込みで方位を N-43°-E にとり下段の掘り込み内にほとんど壁を接して 0.9 m × 0.8 m、厚さ 40 m の方形の花崗岩の自然礫が平坦面を上にしてある。土壤の深さは山側で礫の上面まで 40 cm 底面まで 95 cm である。自然礫下には 25 cm 程の円盤が 3 個これを支える様に有るが地山内の自然礫と思われる。この底面に施設は何も認められない。この大石を検出した時点では小石室か經塚等の埋納遺構と期待されたが下部からは遺物も何も検出されなかった。覆土が黄灰色土で 8 号墳周溝の最下層の堆積土と類似しており、これに近い時期の可能性がある。8 号墳と同時期とすれば石室構築材を掘削途中で放棄したものとも考えられるし、大石の平坦面を何らかの理由で使用するため掘えられたとも考えられる。

Fig. 34 SK-01 (1/40)



Fig. 35 SK-01(右)、04 (北から)

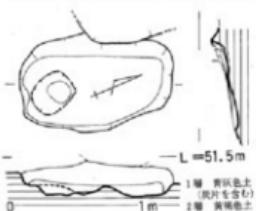
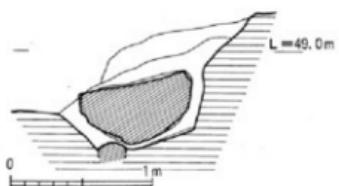
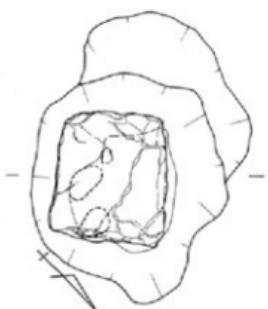


Fig. 36 SK-04 (1/40)



SK-05 (Fig. 40・41)

8号墳の西側の周溝内に位置しこれに切られる。標高49m付近にある $1.55\text{m} \times 0.65\text{m}$ の長楕円形で方位をN-5°-Wにとり山側で深さ70cm・断面逆台形。底面に10~25cmの疊が数個有る。覆土は黄灰色土下に黒褐~暗褐色土が有り、8号墳下の堆積層と同様であり、これに先行する。

SK-03 (Fig. 42~44)

SK-02の南側2mの標高49.5m付近に位置する。 $1.5\text{m} \times 0.95\text{m}$ の楕円形プランで方位をN-38°30'-Wにとる。深さは山側で105cmを測り、断面は垂直に近い逆台形。この底面中央にさらに $45 \times 36 \times 38\text{cm}$ の方形の掘り込みが有り、この内部に径6cm程の小柱穴が5個均等に配されて検出された。この2段目の掘方内には青灰粘土が充填されており、小柱穴はこの上端付近まで延びていた。落し穴の逆杭を設置したものと思われる。

SK-06 (Fig. 45)

8号墳掘方の西側肩中央部で検出されこれに切られている。1.25mの長楕円形プランで山側で深さ50cm。方位をN-5°30'-Wにとる。SK-03と同様の堆積で底面に青灰粘土が充填され小柱穴2本を検出した。同じく落し穴の逆杭と思われる。



Fig. 38 SK-02 (北から)

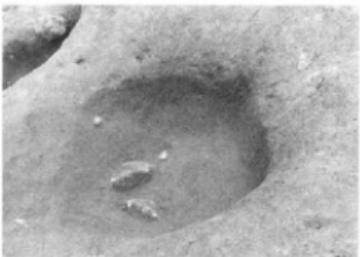


Fig. 39 SK-02完掘状況 (北から)

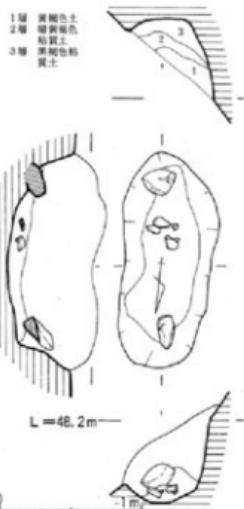


Fig.40 SK-05 (1/40)



Fig.41 SK-05 (南から)

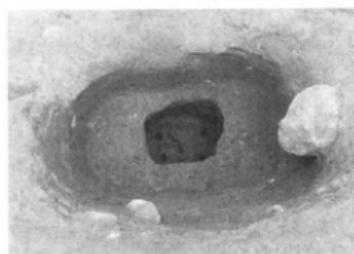


Fig.43 SK-03 (西から)

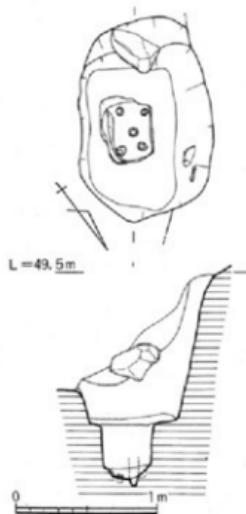


Fig.42 SK-03 (1/40)



Fig.44 SK-03 (北から)

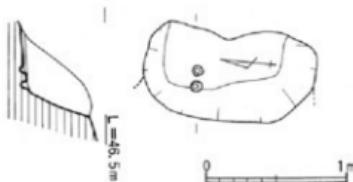


Fig.45 SK-06 (1/40)

## IV. 小 結

- 1) 8号墳下と丘陵斜面段丘面の地形変換線付近で3基の落し穴を検出した。長さ1.25~1.55幅0.65~0.95mの長楕円形のプランで、深さは1m近く幅に比べ深いもので、壁も切り立っている。特にSK-03は底面に5本の逆杭を設置した整ったもので、この様な明確に落し穴と判断される遺構は市域では初めての検出と思われる。残念ながら遺物の検出を見なかつたが、土壌内の覆土は8号墳下に厚く堆積する地山土と同一であり、明らかに古墳より先行する。周囲では黒耀石製の鉄器を2点検出しておらず、縄文時代に属する可能性が高い。
- 2) 調査対象4基の円墳中3基の古墳の誤認を立証する結果となり、調査時点では4号墳の存在も確認できなかった。第1次調査の1~3号墳と今回の8号墳の存在は確定しているため今後古墳群内の号数を整理する必要がある。
- 3) 8号墳は墳丘径15.4m、残存の墳高2.8mの円墳で主軸をN-5°30'-Wにとり南に開口する单室両袖の横穴式石室を主体とするもので、石材は全て大戦中に抜き去られていたが、抜き跡から復元すると玄室は幅2.0m長さ3.5m程の長方形プランで羨道は幅1m長さ3.7m程の、墳丘に比較して小規模な石室であったと思われる。
- 4) 遺物は石室部・墓道からⅢ・Ⅳ・Ⅴ期にわたる須恵器とガラス小玉多数・2対の耳環等を検出、6世紀末の初幕から7世紀中頃まで最低2回の追葬が考えられる。馬具の検出はない。また近世の白磁香炉・仮飯器・灯明皿・銅鏡等を検出しておらず、近世には開口して祠等がまつられ信仰の場となっていた様である。また墳丘内供獻の土器を一括で多量に検出し、層位から天井石架構時に行われた祭祀である事を確認。須恵器蓋坏の内部に魚骨の残存が確かめられた。羽根戸古墳群E群8号墳の例からすると淡水産の硬骨魚の切身の可能性が高い。
- 5) 8号墳は本古墳群中、不明の4号墳を除き最大規模で最古の古墳と思われる。これに1→2→3号墳と続き南から北へ築造が移動している。鉄器は鉄刀・刀子・鉄鏃と鉄留金具で馬具は持たない様で工具・農具等の生産用具もなく、大谷・倉瀬戸古墳群等の様に鉄滓の検出もない。この傾向は1・2号墳に引き継がれている。倉瀬戸・大谷古墳群と柏原古墳群との有力集団の間隙で古墳も疎らな地域に立地しており造営者は此等より一ランク下位の集団に位置づけられよう。

No.	石室構造	主室(幅×奥深)(幅×奥深)	開口方位	出土実物	知る時	墳丘
1	横穴式石室	(幅1.5~2m)全長4m前	N-182° E	須恵器高环・泡・盖环・高脚平 金環・武鉗・砾石	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	約10m?
2	横穴式石室 (複数形)	(1.5×?) (0.7×?) 全長4.5±	N-151° E	須恵器高环・泡台形・高脚盤・高脚 鍬刀・刀子・鉄鏃・刀子・鉄鏃 天井石・鉄留金具・鉄留金具・ ガラス玉・砾石	Ⅳ・Ⅴ・埴	約10m?
3	横穴式石室 (單室両袖形)	(1.3×0.6) (0.6×1.4) 全長2.2m	N-158° E	無し		約4m?
4	横穴式石室?	不明	不明	不		約20m?
5	横穴式石室 (複数形)	(2.0×3.5) (1.0×3.7) 全長7.2m	N-175°30' E	須恵器高环・泡环・泡・蓋・泡 鉄留金具・天井石・高脚・高脚盤・高脚 土師器不・蓋环・空碗・破壊・ ガラス玉・鍬刀・刀子・鉄留金具	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	15.4m

註1 「戸古墳群」福岡市西区東油山字戸古墳調査報告書 1975年 株式会社リコ

註2 手前4年度より6年計画で遺跡分布地図を立てて記入

註3 「福岡市古墳群」福岡市歴史文化財調査報告書106号 1989年 福岡市教育委員会

---

## 瀬戸口古墳群

—第2次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第298集

1992年（平成4年）3月13日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 久野印刷株式会社

---

瀬戸口古墳群 第2次調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第298集

1992

福岡市教育委員会

